

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01011

研究課題名(和文) 植民地末期インドネシア・ムスリムの国際関係認識

研究課題名(英文) Indonesian Muslims' view on international relations in the late colonial period

研究代表者

小林 寧子 (Kobayashi, Yasuko)

南山大学・外国語学部・研究員

研究者番号：60225547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ライデン大学図書館とハーグ国立文書館で、1920年代から日本占領までのイスラーム団体の動向に関して、植民地文書・文献を収集した。ジャカルタ国立図書館ではイスラーム系定期刊行物(Adi他)を収集した。当時の「ムスリムの声」を知ることができる資料である。暫定的研究成果として次のことを示した。1) 定期刊行物の出版状況の概観。運動体の機関誌から一般読者を対象とした情報誌へと移行する傾向があった。2) イスラーム系定期刊行物には海外情報が豊富。ムスリムは自らの位置を国際社会の中で位置づけようとしていた。3) ムスリムの民族意識は、反オランダ植民地主義と同時に他地域のムスリムとの交流の中で醸成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インドネシアの植民地末期に関する研究は、独立をめざす民族主義運動を主軸として行われてきた。プミボラの政治活動を警戒する植民地政府の文書を主たる資料としたために、宗教・社会問題を運動の目的に掲げるイスラーム団体は非政治的とされて、等閑視される傾向にあった。本研究では、当時の「ムスリムの声」を載せたイスラーム系定期刊行物や小冊子を資料とすることで、今まで論じられなかったムスリムが世界情勢に大きな関心を払っていたことが明らかになってきた。イスラーム世界の中の西欧列強の動きを見て、オランダを相対化し、国際関係の中で自らの立ち位置を認識するようになったという、新しい視点を出した。

研究成果の概要(英文)：We have collected the following materials: 1) Dutch colonial documents and literature concerning Muslim organizations; and 2) several periodicals published by Muslim associations. We can analyze the views and perceptions of Muslims from the late colonial period from these.

Our research results highlight the following points. 1) The Islamic periodicals flourished along with types of periodicals during the late colonial period. They tended to change from organizations reporting their activities to informational magazines targeting a public audience. 2) A lot of information on foreign affairs appeared in these periodicals, many of which were published by the Muhammadiyah activists. 3) Muslim nationalism was forged in two phases. Resistance to the Dutch colonizers was awakened, and they also felt distance from foreign Muslims. 4) The Muhammadiyah was the sole native organization that spread nationwide before independence even though its importance was rather underestimated.

研究分野：インドネシア近現代史

キーワード：植民地インドネシア イスラームとナショナリズム イスラーム系定期刊行物 プルグラカン(プミボラ運動) ムハマディヤの全国展開 戦間期の国際情勢 パレスチナ問題

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

インドネシアのイスラームに対する関心は、この四半世紀くらいでかなり変化して大きくなった。「現代イスラーム世界の動態的研究:イスラーム世界理解のための情報構築と情報の蓄積」

(1997年4月～2002年3月)を境にインドネシアが世界最大のムスリム人口を擁する国で重要なことがやっと認識されるようになった。しかし、その間にインドネシアの国内情勢は、長期開発独裁政権の崩壊、ウラマー大統領の誕生、民主化で隠れていた急進派が浮上りと、大きく変動した。世界でも9・11事件、アフガン攻撃、イラク戦争と大きな事件が相次ぎ、それにインドネシアのムスリムもその都度大きく反応したことから、関心は現代に集中した。しかも、声高な急進派の動向ばかりが注目された。インドネシア共和国よりも長い歴史を有するイスラーム団体も政治絡みで考察されがちであった。しかしながら、新しい団体が続々と誕生しても社会での存在感が揺るがないそのレジリエンスに改めて気づかされるようになった。老舗のイスラーム団体はいかにして社会に根を下ろしてきたのか、歴史的に見直す必要があるように思われる。

インドネシアの植民地末期(戦間期から日本占領が始まるまで)に関する研究は、独立をめざす民族主義運動を軸として行われてきた。宗教・社会問題を運動の目的に掲げるイスラーム団体は非政治的とされて、等閑視される傾向にあった。加えて、インドネシア研究全体でも歴史への関心は小さくなっている。この植民地期のイスラームに関する研究はアラブ人移民やイスラーム法に関する研究に進展があったものの、イスラーム運動については30年以上停滞している感がある。

2. 研究の目的

本研究では、まず従来の研究が関心を向けなかった、植民地インドネシアのムスリムが世界情勢をどのように見ていたかということを描き出し、その中で、自らの立ち位置を確認していたことを明らかにすることを目的とする。また、あまり使用されて来なかったマレー語の定期刊行物が当時の「ムスリムの声」を知る上でカギとなる資料であることを示す。

3. 研究の方法

1) 資料について

植民地期のイスラーム運動が等閑視されがちな原因のひとつはブミプトラ(土地の人、オランダ語では *inlander* [原住民]、同時にほとんどがムスリムと同一と考えられる)の政治活動を警戒する植民地政府の文書を主たる資料としたために起きたと考えられる。植民地文書は起きた出来事の時間や場所、特に官吏が立ち合うもとで行われた集会では登壇者名のみならずその議論や演説の要約までが記されている。ただし、政府の関心外のことは抜け落ちる。例えば、政治的に危険視されない人物に関しては注意を向けられていない。また、何よりもブミプトラの思考に立ち入ることができない。

上記の問題を克服するために、当時の「ムスリムの声」を聴くべく、主に現地語(マレー語、のちのインドネシア語)の定期刊行物を用いる。そのために、作業としてはまずその定期刊行物の発行概況をつかみ、その中から重要なものを選んで収集する作業を行った。

とは言え、オランダ語植民地文書・文献と情報を突き合わせて確認する作業も欠かせない。植民地文書に関しては、重要な資料がすでに出版されている[van den Wal: 1967][Kwantes: 1975, 1978]ので、そちらを使用するほか、オランダ語文献サイトの *Delpher* で検索した。

2) 視角

従来の研究では、20世紀前半のブミプトラの運動は、民族主義、イスラーム、共産主義の3つに分類されて扱われ、特にイスラーム運動は他の運動体との関りはあまり考慮されず、インドネシア史では切り離されて叙述されてきた。本研究では、イスラーム運動団体間ならびに民族主義運動体との交流にも目を配りながら、イスラーム運動の発展を追うことにした。

民族主義運動ではオランダ植民地支配者 vs ブミプトラという構図でとらえられていたが、1920年代から飛躍的に増えるブミプトラ編集の定期刊行物の中には、多くの海外情報を掲載するものがあることに着目した。第一次大戦後にイスラーム世界の構図(オスマン朝の崩壊、イブン・サウードの聖地掌握など)は大きく変動したことがどうとらえられているか、ムスリム目線で、あるいは植民地インドネシアからは世界はどう見えるのかという視点を重視した。また、国際情勢に関する関心・認識は、国内の運動にはどのような影響を与えたのかも考察を試みた。

その関係で、収集した定期刊行物は、特定の記事だけを選んで部分読みするのではなく、できるだけくまなくして情報を拾うようにした。

4. 研究成果

1) 資料収集

a) オランダ：研究代表者が2019年7・8月に2週間資料収集

インドネシア関係の研究資料は、かつてはKITLV（王立言語・地理・民族研究所）に所蔵されていたが、今はすべてライデン大学図書館に移管された。それで、作業はその大学図書館で行った。植民地期の発行された政府報告書文献、ならびに未刊行文書（特に原住民問題顧問局関係）を閲覧・収集（スキャン、写真撮影、通常の複写による）した。

ハーグ国立文書館では、前もって準備していたムハマディヤにアフマディヤ（英領インド発祥の運動）が関係を構築・決裂する事情を記した文書を収集すると同時に、それと関連してムハマディヤのキリスト教布教に対する反発を記した文書を閲覧した。1930年代に東インドのムスリムがパレスチナ問題に関与する資料を確認した。

ただし、植民地期の定期刊行物に関してはオランダでは所蔵は多くはなく、あってもジャカルタの国立図書館の複写物であった。また、植民地政府の刊行文献・文書も必ずしもそろっているわけではなかった。

b) インドネシア：研究協力者2名が2018年8月に2週間、2019年9月研究代表者と研究協力者1名が一週間、国立図書館（ジャカルタ）の新館・旧館で資料収集を行った。

すでに選択していたイスラーム系新聞（のちに週刊誌に変更）*Adil*（1932年－1942年）をスキャンし、デジタル化することを試みた。国立図書館では、閲覧者が直接スキャンすることは許されず、図書館員に注文しなければならない。大量のデータとなるが、図書館側から渡されたデータを現物と突き合わせたところ、多くの頁がスキャンされていないことがわかった。また現物の損傷も激しく、頁番号がなかったり誤植されていたりして、確認作業に手間取った。作業を続行する予定であったが、新型コロナ問題で渡航が不可能となり、結局作業は中断している。*Adil*にはマイクロフィッシュからデジタル化したものもあるが、焦点がぼけて解読困難な部分が多い。今後何らかの方法で作業を続行することを考えている。一方、オランダでは見いだせなかった植民地文書や刊行物もジャカルタの国立図書館旧館に所蔵されていた。初期のIPO（原住民マレー語定期刊行物摘要）のもの（謄写版）である。

ジャカルタの国立図書館には、行方がわからなくなつた植民地文献もあり、保存状況も良好とは言えない。できるだけ近い将来に内外のアーキビストや研究者による文献整理が必要と思われる。

今回の資料収集で使用可能な定期刊行物は、*Soeara Moehammadijah*（スキャンデータ版）、*Bintang Islam*（複写）、*Adil*（スキャンデータ、作業途中）である。

2) 資料整理・解読・分析による研究成果（現段階で示せること）

要旨：本研究では、植民地インドネシアの「ムスリムの声」を掲載したイスラーム系定期刊行物を主たる資料とすることで、植民地のムスリムが世界情勢に大きな監視を払っていたことが明らかになった。イスラーム世界の中での西欧列強の動きを見て、植民地支配者オランダを相対化して理解し、国際関係の中で自らの立ち位置を認識していったという新しい視点を出した。具体的には、1938年に結成されたイスラーム連合体 MIAI では、その目的に唯一の国際問題である「パレスチナ問題」があげられ、その支援が謳われた。また、パレスチナ問題が実質的にイスラーム世界の連帯をつくっていくこと、ならびにその問題が東インドにおいては日中戦争との絡みで認識されていることもわかった。東インドは東西を見渡して国際情勢を把握する立場にあった。

a. 定期刊行物出版概況

IPO (*Overzicht van de Inlandsche en Maleisch-Chineesche Pers* 原住民系およびマレー語中国系報道摘要) に基づいて、1918年から1930年代後半までの定期刊行物出版状況を見ると、次のことが明らかになった。i) この間に定期刊行物は約7倍に増加した、大半は短命であったが。ii) 運動体の機関誌から一般読者を対象とした情報誌に移行する傾向があった。iii) 8割近くがマレー語によるかマレー語と他言語との併用による出版。ただし、ジャワ語とスダ語による出版は継続的に多かった。iv) 年を追うごとに、ジャワ島での出版数の伸びが大きい。ジャワ島外での出版数も増加するものの、相対的にその占める割合は小さくなる。v) イスラーム系定期刊行物に絞っても同様の傾向がある。ただし、主要出版地が中部ジャワのスラカルタ、ジョクジャカルタであるのは、ムハマディヤ活動の影響が大きい。

b. ムハマディヤについて

当初はこの運動体について詳しく調べる計画はなかったが、先行研究を検討して収集した資料を突き合わせたところ、現在もインドネシアの主流団体の一つであるムハマディヤに関する

研究がこの30年以上進展していないことが痛感された。ムハマディヤは「非政治的」と考えられ、植民地政府の関心も小さかったようである。しかし、独立前に全国展開を果たした唯一のイスラーム団体であるため、改めてその展開の足跡を設立者ダフラン、その没後の運動の司令塔ファフロディンを軸に追った。

その結果、ムハマディヤはその結成、組織発展ともに他のブミプトラ団体の支援を受けたり、提携したりしていたこと、また政治を避ける人々の受け皿となっていたことも明らかになった。1920年代のムハマディヤの組織展開が明らかになった。実績重視で支部を育成し、全国大会を会員の連帯感醸成の場として全国大会への道を切り開いた。また、ファフロディンが編集した情報誌 *Bintang Islam* には国際情報が多く、思わぬ発見となった。

c. 国際情勢に関する認識

オランダが中立国であったために第一次大戦のインパクトにはそれほど関心が向けられなかったが、植民地の住民は大国に翻弄されるオランダの国際社会における「弱さ」を知ったことが明らかになった。オスマン朝の崩壊、イブン・サウードの聖地掌握にも列強（特にイギリス）は関与しており、その動向に関心を向けている。また、イギリスに抵抗する英領インドの反植民地活動への関心の大きさが明らかになった。英領インドのムスリムはイスラーム世界の中でも強い存在感を示しており、とくに巡礼地メッカで低く評価されていた東インドのムスリムは憧れにも似た尊敬の念を持ってその動向を見つめていた。しかし、1926年のメッカとカイロでのムスリムの国際会議は期待外れに終わり、英領インドのムスリム運動に対する関心も一時的に冷める。その一方、東インドのムスリムは深刻化しつつあるパレスチナ問題に関心を払い、新たなムスリムの国際連帯が芽生えようとしていた。また、国際場裏で展開される帝国主義列強の利害の衝突からも自らの命運がそこで左右されると認識し始めた。

なお、海外に関する情報は英語紙誌から多くを得ており、これについてはなぜそれが可能だったのかについては別途調べる必要があるように思える。

d. 二つの方向からのナショナリズム

かつて Laffan (2003) が指摘したことであったが、ムスリムのナショナリズムは2方向から形成されていくことが、*Bintang Islam* から明らかになってきた。ひとつは他の民族主義者と同じくオランダの植民地支配に反対して、もうひとつはメッカなどで他のムスリムと交流する中で「民族」としての意識が育まれてくるというものである。後者に関しては、1883年にメッカで調査を行ったオランダ人研究者 Snouck Hurgronje も、インドネシア（当時は蘭領東インド）からの巡礼者・長期滞在者が特別に搾取されることなどに触れていた。メッカでの苦い経験は1920年代まで続いており、他地域のムスリムとの違いを認識させたようである。その一方、ムスリムとしてのアイデンティティはオランダ東インド領内では民族意識を醸成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yasuko KOBAYASHI	4. 巻 18
2. 論文標題 Islamic Periodicals in Late Colonial Indonesia: A Picture from the IPO's Lists of Vernacular Periodicals	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南山大学紀要『アカデミア』社会科学編	6. 最初と最後の頁 95-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15119/00002869	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小林寧子	4. 巻 23
2. 論文標題 1920年代のムハマディヤを語る二つの定期刊行物：『スアラ・ムハマディヤSoeara Moehammadijah』と『ピンタン・イスラームBintang Islam』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南山大学紀要『アカデミア』社会科学編	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山口元樹	4. 巻 79巻1号
2. 論文標題 アラブ地域の定期刊行物が構築するネットワークと東南アジアのムスリムの仲介者：カイロの雑誌『ファトフ』を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『史苑』（立教大学史学会）	6. 最初と最後の頁 120-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00017930	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山口元樹	4. 巻 58巻2号
2. 論文標題 イスラームの文字，マレーの文字：独立期インドネシアにおけるジャウィ復活論とマラヤとの関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 141-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20495/tak.58.2_141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口元樹	4. 巻 特別号
2. 論文標題 モハンマド・ラシディの「知識を求める旅」：20世紀前半におけるインドネシアからカイロへの留学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 なじまあ	6. 最初と最後の頁 71-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 KOBAYASHI Yasuko
2. 発表標題 What Ahmadiyah Brought to Muhammadiyah: Based on Bintang Islam (1924-1930)
3. 学会等名 ICAS11（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 インドネシア・ムスリムの見た第一次大戦後の世界
3. 学会等名 東南アジア学会第99回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 イスラームとナショナリズム：『ビントアン・イスラーム』（1923-1930）を読み解く
3. 学会等名 セミナー「『国民国家』インドネシア再考」（南山大学アジア・太平洋研究センター）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 オランダ植民地末期ナフダトゥル・ウラマーによる‘イスラーム国家論’
3. 学会等名 セミナー「‘国民国家’インドネシア再考」(南山大学アジア・太平洋研究センター)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 東インドにおける定期刊行物の史料としての可能性 Van Dijk (2007) と Yamamoto (2019) を中心に
3. 学会等名 東洋文庫インド・東南アジア研究部門、東南アジア研究班研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 植民地インドネシアにおけるムスリムの国際関係認識 『ピントアン・イスラーム』から見た第一次世界大戦後の世界
3. 学会等名 東洋文庫インド・東南アジア研究部門、東南アジア研究班研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 植民地期インドネシアのイスラームに関する研究の総括
3. 学会等名 東洋文庫インド・東南アジア研究部門、東南アジア研究班研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 1920年代ムハマディヤ運動の拡大とファフロディン
3. 学会等名 東洋文庫インド・東南アジア研究部門、東南アジア研究班研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林寧子
2. 発表標題 アフマド・ダフラン再考
3. 学会等名 東洋文庫インド・東南アジア研究部門、東南アジア研究班研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 ナフダトゥル・ウラマーの「イスラーム国家」論：オランダ植民地期インドネシアにおける伝統派ムスリムの変容
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究 トランスナショナルなネットワークと現地の応答」2021年度第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 オランダ植民地期インドネシアからのエジプト留学：知の獲得とイスラーム運動とのネットワーク
3. 学会等名 シンポジウム「アジアの海を渡る人々：18・19世紀の渡海者」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 イスラームの文字・マレーの文字：国民国家独立期インドネシアにおけるジャウィ復活論とマラヤ
3. 学会等名 東南アジア学会中部例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 山口 元樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 304
3. 書名 インドネシアのイスラーム改革主義運動	

1. 著者名 Masashi HIROSUE(editor), Motoki YAMAGUCHI, et. al	4. 発行年 2020年
2. 出版社 The Toyo Bunko	5. 総ページ数 232
3. 書名 A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers in Southeast Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土佐林 慶太 (Tosabayashi Keita) (10905764)	早稲田大学・文学学術院・助手 (32689)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山口 元樹 (Yamaguchi Motoki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関